

# 東アジア世界の展開とモンゴル帝国

10世紀以降、キタイ・金は、遊牧・農耕をたばねる唐の支配を継承した。宋は、唐代以来の海運との関係を強めた。13世紀、モンゴル帝国がユーラシアの陸と海を結合した。

Q▶ 東アジアの諸国家はどのような性格をもち、またモンゴル帝国はどのような役割を果たしたのだろうか。

## アジア諸地域の自立化と宋

Q▶ 唐の滅亡は、アジア諸地域にどのような影響を与えたのだろうか。

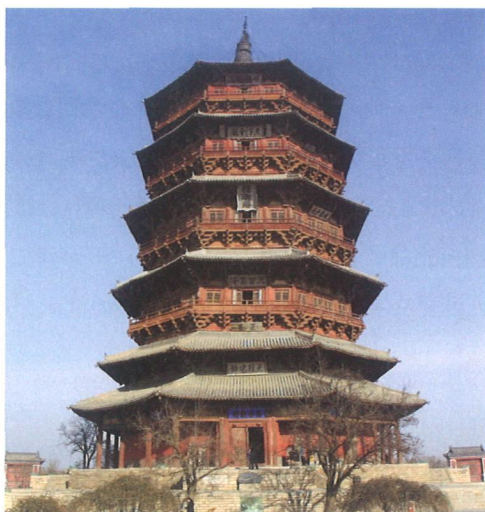
### 東アジアの勢力交替

Q▶ この時期に成立した東アジアの諸国には、どのような共通点があるだろうか。

8世紀半ばの安史の乱によって唐を中心とした国際秩序がゆるむと、国家主体の朝貢貿易は衰え、かわって民間交易が盛んになった。こうしたなか、日本から大陸への公的使節の派遣も、9世紀前半にとだえた。

唐が滅亡した10世紀前半には、近隣諸地域においても政権の交替や動揺があいついだ。中央ユーラシアでは、9世紀半ばにウイグルが崩壊したのち、遼河上流域で半農半牧の生活を営んでいたモンゴル系のキタイ（契丹）が勢力をのばした。10世紀初めには耶律阿保機（太祖）がモンゴル高原東部を中心に強力な国家をつくり、東は渤海を滅ぼし、西はモンゴ

応県木塔(仏宮寺 釈迦塔) キタイでは仏教が手厚く保護され、多くの仏塔が建てられた。大同付近にある応県木塔は、その一例である。この塔の内部からは、キタイ時代の木版大蔵経が発見されている。

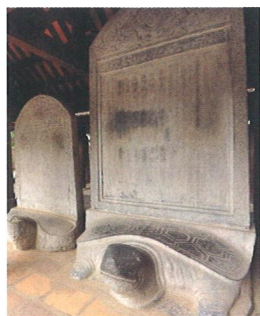


11世紀後半の東アジア



高麗青磁 素材に入れた刻みにほかの材料をはめこむ象眼の技術を青磁に応用する手法は、高麗で始まった。

①燕(現在の北京)・雲(大同)を中心とする地域。五代の後晋(→p.52)から割譲させた。



ハノイの文廟(孔子廟) 11世紀後半、大越(李朝)は都の昇竜(ハノイ)に孔子をまつる施設と儒学教育機関を設け、科挙を導入した。写真は文廟に並ぶ科挙合格者の名を刻んだ石碑。



「源氏物語絵巻」(絵(右)と詞書(左)) 宮廷の女性たちを描いた場面。平仮名の使用は、まず宮廷や貴族の女性たちのあいだで広まった。

### 都を開城に定めた

ル高原全域をおさえた。その後、<sup>かほく</sup>キタイは華北の政変に介入して、<sup>えんぐん</sup>燕雲十六州<sup>①</sup>を獲得した。朝鮮半島では、<sup>おうけん</sup>王建の建てた<sup>こうらい</sup>高麗が<sup>しんら</sup>新羅にとってかわり、<sup>うんなん</sup>雲南でも<sup>なんしやう</sup>南詔が減んで<sup>だいり</sup>大理がおこった。日本では<sup>だいり</sup>律令体制の崩壊が進み、朝廷からの自立をはかるものも現れた。またベトナムも、10世紀に中国の支配下から独立した。

こうした政治的な変化にともない、東アジアの諸国では、中国から受け継いだ文化や制度を独自のものに発展させる動きがおこった。キタイは<sup>しゆりやうみん</sup>狩猟民・<sup>ゆうぼくみん</sup>遊牧民を部族制によって、<sup>しやうけんせい</sup>農耕民を州県制によっておさめる<sup>じゅうくわ</sup>二重統治体制をしき、漢字をもとにしてウイグル文字の影響も受けた<sup>きつ</sup>契丹文字を生み出した。その国号も、開期によって民族名に由来するキタイと中国風の<sup>りやう</sup>遼の双方が用いられた。また、キタイでは仏教が受容され、寺院が多数造営された。

平安時代の日本では、中国文化の基礎のうえに日本風の特色が加味され、貴族政治のもと、仮名文字や大和絵に代表される<sup>こくふう</sup>国風文化が栄えた。高麗でも、仏教經典を集成した<sup>だいにぞうきやう</sup>『大蔵経』の印刷や高麗青磁の製作が始まった。11世紀前半におこったベトナムの<sup>だいえつ</sup>大越(李朝)は<sup>じゆかく</sup>仏教や儒学を導入し、現在の中国西北部でチベット系のタンゲートが建てた<sup>せい</sup>西夏は、漢字の構造をまねた<sup>せい</sup>西夏文字をつくって、仏典などの翻訳を進めた。

### 宋と金

Q 宋の対外関係には、どのような特徴があったのだろうか。

<sup>ごだい</sup>五代の武將から身をおこした<sup>ちやうきやういん</sup>趙匡胤(太祖)は、960年に<sup>そう</sup>宋(北宋)を建て、つぎの太宗は中国の主要部を統一した。安史の乱ののち<sup>せいか</sup>節度使が各都を開封においた。



12世紀頃のアジア 12世紀から19世紀末まで、黄河は南流して淮河に注いでいた。黄河の運ぶ大量の土砂が淮河の狭い河道を詰まらせるため、国家の管理が行き届かなくなると、黄河はたびたび氾濫した。

地に割拠し、唐末から五代の時代には武人が権限を握ったことから、宋は皇帝の親衛軍を強化し、科挙によって選ばれた文人官僚が政治をとりおこなうようにした(文治主義)②。結果として中央政府の力は強まったが、多くの官僚や軍隊を維持するための経費は、国家の財政を圧迫した。

近隣諸国の成長や文治重視の姿勢は、宋の対外関係に影響を与えた。燕雲十六州の帰属をめぐる緊張関係にあったキタイとのあいだでは、宋が毎年多額の銀や絹を贈る内容の和議(澶淵の盟)を結んだ。西夏の勢いが盛になると、宋は西夏にも毎年銀や絹・茶を贈った。これらの費用も財政上の負担となるなか、11世紀後半に宰相となった王安石は、財政再建と富国強兵をめざして、農民や中小商工業者の保護・育成、治安維持や国防防備の民間委託などをおもな内容とする新法③を実施したが、地主や大商人の反発を受けた。のち官僚たちは新法党と新法に反対する旧法党にわかれて激しく対立し、政治の混乱を引き起こした。

#### 司馬光らの一派。

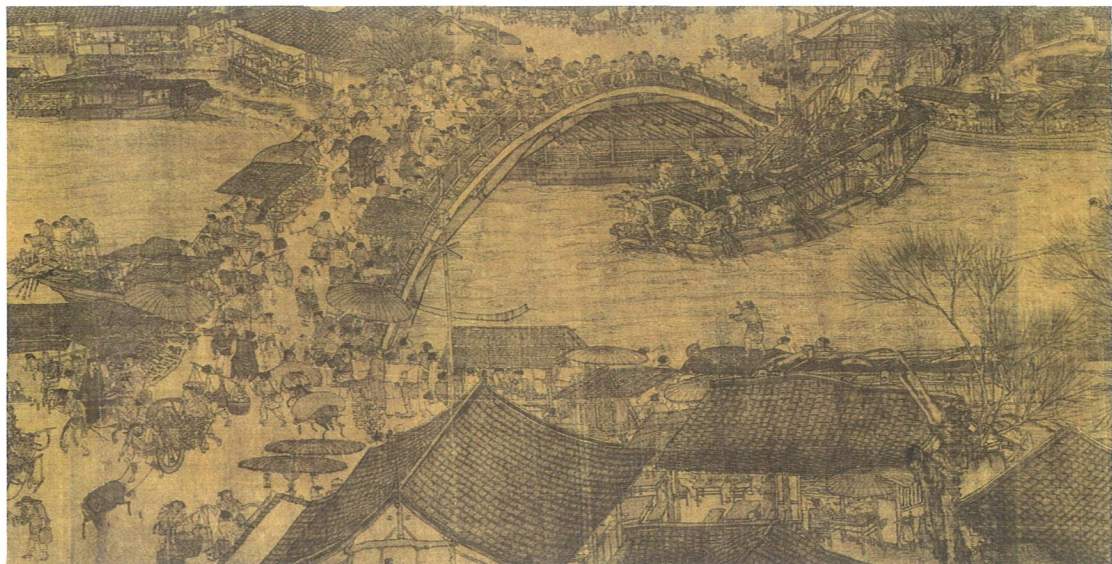
12世紀初め、キタイの勢力圏の東部にいた狩猟・農耕を生業とするツングース系の女真(ジュシェン)から完顔阿骨打(太祖)が現れ、キタイから自立して金を建てた。金がキタイを滅ぼしたのち、宋と金とのあいだで争いがおこり、宋は都の開封を占領されて、上皇の徽宗と皇帝の欽宗は捕虜となった(靖康の変)。宋は江南に逃れた皇帝の弟(高宗)によって存続し(南宋)、臨安(現在の杭州)に都を定めた。南宋は、その後の主戦派と和平派との対立の末、金に臣下の礼をとって毎年銀や絹を贈ることを条件④に和議を結び、淮河を国境とした。

金に対する和平派(秦檜ら)と主戦派(岳飛ら)が対立した結果

②隋・唐では科挙のほか貴族の子弟を取り立てる制度があったが、宋代になると官吏への道は科挙にほぼ限定されるようになった。最終試験は皇帝みずから試験官となって宮中でおこなわれ(殿試)、皇帝と官僚の結びつきが強化された。

③貧しい農民に金銭や穀物を貸しつける青苗法、物資流通の円滑化と物価安定をはかる均輸法、労役のかわりに出させた金銭で人を雇う募役法、中小商人に融資する市易法、農村組織をつくらせて治安維持や民兵の訓練をおこなわせる保甲法などがあった。

④南宋が金に臣下の礼をとるという条件はのちに改められ、贈る銀や絹の量も減らされた。



### 荘綽『鶏肋編』

むかし、開封の都の数百万の家ではみな石炭を用い、薪を使う家など一軒もなかった。ひるがえって、[近くに利用できる産炭地がない]呉・越の地[の臨安]を仮の都としている現在とはいうと、あたりの山林は広いものの、日々の燃料を得るには十分でない。美しい花やみごとな竹、墳墓をおおっていた木々さえも、年月を経るうちに、すっかり失われてしまった。わずかな根っこまでことごとく掘り出され[て燃料として利用され]、新しい芽が出なくなってしまったからだ。[こうしてみると]石炭の便利さというのは得がたいものであった。

(著者訳)

宋代の都市の繁栄 船の通行の便をはかったアーチ形の橋の上には、多くの露店が出てにぎわっている。北宋末の『清明上河図』より。



「清明上河図」

Q▶ これは、南宋の初めに編まれた逸話集の一節である。宋代に進んだ都市化は、都市の人々の生活や自然環境にどのような影響を与えたのだろうか。

金は女真人を**猛安・謀克**という部族制にもとづく軍事・社会制度によっておさめつつ、華北を征服したのちには中国式の統治制度も採用した。また、金のもとでは漢字や契丹文字の影響を受けた**女真文字**もつくられた。金が宋と争った12世紀は、高麗で武臣(軍人)が実権を握り、日本でも武士がその地位を高めて鎌倉幕府を建てるなど、東アジアにおいて武

### 唐末から宋代の社会と経済

Q▶ 宋代の経済発展は、社会にどのような変化を引きおこしたのだろうか。

① 茶を飲む習慣は中国西南部で生まれ、唐代に広範囲に広がった。

安史の乱ののちも唐がもちこたえたのは、江南の経済力に支えられていたためであった。江南は南朝の頃から開発が進み、塩や茶①の産地であったことに加えて、海上交易でも栄えていた。一方、唐代後期になっても政治の中心は華北にあったので、華北と江南を結ぶ大運河の役割は、

→p.47

いっそう重要になっていった。また、唐代における生産力の高まりを受けて、商業活動や商品流通が盛んになり、唐末には都市のなかだけでなく、城外や交通の要地にも**草市**・**鎮**などと呼ばれる商業の拠点<sup>きょてん</sup>ができた。

唐の滅亡後、五代の多くが黄河と大運河の接点である**開封**<sup>かいほう</sup>を都とし、

- 5 また十国のうち江南に建てられた国々が商業に力を入れたことは、こうした動きを受けたものであった。唐末以降の経済の発展によって富裕<sup>ふゆう</sup>になった人々は、農地を開墾<sup>かいこん</sup>したり買い集めたりして地主となり、収穫物の半分ほどの小作料<sup>こさくりょう</sup>をとって佃戸<sup>でんこ</sup>(小作人)に耕作させた。このような新興地主層は**形勢戸**と呼ばれる。

- 10 開封に都を定めた北宋は、大規模になった民間の商業活動をおもな財源とした。専売とされた塩・茶のほか、米や絹などを扱う大商人が現れ**行**(商人)・**作**(手工業者)などの同業組合も生まれた。中国商人の海上進出も活発化し、絹や陶磁器・銅銭などが輸出された。宋は**市舶司**を廣州・泉州・明州(現在の寧波)などの港に広くおいて、海上交易の管理につとめた。江南の開発は臨安を本拠とした南宋の時代にさらに進み、低湿地<sup>ていしつち</sup>の干拓やひでりに強い占城稲の導入などによって稲の生産量が増大したことで、長江下流域は穀倉地帯となった<sup>③</sup>。陶磁器や茶・絹の生産も拡大し、商品を運ぶ手段として水運が大いに発達した。

- 宋代には商業の活性化にともない、銅銭が大量に発行され、価値の高い金・銀も地金のまま決済に使われた。遠距離間の取引に便利な手形は唐代に現れていたが、宋ではこれが紙幣としても利用されるようになった<sup>(交子・会子)</sup>。銅銭は日宋貿易を介して日本にももちだされ、日本の貨幣経済の進展をうながした<sup>④</sup>。

- 宋代の諸制度や政治は、経済や社会の動向ととくに深く結びついていた。25 政府が巨額の軍事費を支出するために税を中央へ運ばせたことは、物資の流通をいちだんと活気づけた。科挙は男性であれば基本的に誰でも受験することができたが、儒学や詩文をきちんと学べるだけの経済力をもつ形勢戸にきわめて有利であった。その結果、唐末から五代にかけての混乱<sup>いっそう</sup>が一掃された貴族にかわり、儒学の教養を身につけた資産家官僚<sup>(士大夫)</sup>が地域社会において強い力をもつようになった<sup>⑤</sup>。

② 開封は、長安(→p.51)のような整然とした計画都市ではなく、古くからの街を中心に市場や繁華街が広がってできた都市であった。



宋の白磁 宋代の磁器は産地により多様な特色をもつ。写真は河北の定窯でつくられたもの。

③ 「蘇湖(江浙)熟すれば天下足る」という諺は、こうした状況を表現したものである。

④ 日宋貿易の重要な窓口であったのが博多で、日本の武士の平氏は、ここをおさえて勢力をのぼした。

⑤ 北宋において、おもに華北出身者が旧法党をかたちづかったのに対し、新法党には経済先進地域の江南を含めた南方の出身者が多かった。これは出身地域の経済・社会の状況が、官僚の政治的な立場にまで影響していたことを示している。



院体画(左)と文人画(右) 左の「桃 鳩 図」の作者である徽宗は「風流天子」といわれた文化人で、書画にたくみであった。右の「墨竹図」は蘇軾の作。

## 宋代の文化

Q 宋代の文化には、どのような特徴があったのだろうか。

安史の乱の前後から、文化面では貴族的な華麗さから離れようとする動きが始まっていたが、教養人である士大夫が文化のおもな担い手となった宋代には、さらに精神的・理知的な傾向が強まった。単色で簡素な造形の白磁や青磁、水墨あるいは淡い色彩で描かれた文人画、**歐陽脩**・**蘇軾**に代表される詩文の作風などは、こうした時代性を代表している。一方で、技巧をこらした緻密さや装飾性のなかに趣を見出す風潮もあり、宮廷画家による写実的な**院体画**、繊細ながら力強い**徽宗**の書などがその例である。また金の時代の**華北**でも、**北宋**からの流れを受け継ぎつつ、独自の文化がはぐくまれた。

儒学では、**經典全体**を哲学的に読みこんで、**宇宙万物の正しい本質(理)**に至ろうとする**宋学**がおこった。經典のなかでは、とくに**四書**が重んじられるようになった。儒学の発展は、社会秩序を正そうとする士大夫の実践的意欲とも結びつき、**華夷・君臣・父子**などの区別が強調されるようになった。**北宋**の**司馬光**が編んだ**編年体**の歴史書『**資治通鑑**』にも、**君臣関係を重視する立場**が反映されている。宋学を大成し、正統としての地位を得た**南宋**の**朱熹(朱子)**の学問(**朱子学**)は、のちに**朝鮮**や**日本**にも多大な影響を与えた。

宋学が礼の実践や細かな字句の解釈を離れ、大きな思想の体系をつくりだすに至った背景には、みずからの内面をきびしくかえりみる**禅宗**の

①『論語』(→p.34)『大学』『中庸』『孟子』のこと。



金代の上絵付 金代の華北では、白色の下地に色鮮やかな文様を描いて焼きつける上絵付の技法を用いた陶磁器がつくられた。

牌子(通行証) キタイからモンゴル帝国の時代にかけて、身分を示す通行証として用いられたもの。牌子に刻まれた文字の多様性は、この時代に広域的なヒトやモノの往来が活発になったことだけでなく、文字文化の広がりをも示している。



教えや、道教の神秘的な宇宙論との関わりがあった②。中国独特の仏教である**禪宗**は、宋代に士大夫の支持を受け、12世紀には日本にも伝えられて、支配層となった武士のあいだに普及した。それにともなって日本からの留学僧も増加し、宋学の教えや漢詩文の技法をはじめ、様々な文物を日本へもち帰った。また金の支配下の華北では、儒・仏・道の調和を説く**全真教**が開かれ、道教の革新をとこなえた。

②宇宙論と儒学の教えを結びつけた北宋の周敦頤(1017～73)は、のちに宋学の祖と仰がれた。

**王重陽**が開祖、一方、経済の発展は、新しい庶民的な文化や革新的な技術③を生み出した。都市では講釈師によって語られる物語(小説)や歌と踊りをまじえた雑劇が人々を楽しませ、音楽にあわせてうたう詞が盛んにつくられた。唐代頃に始まった木版印刷は宋代に広まり、活字による印刷方法(**活版印刷術**)も発明された。**羅針盤**や**火薬**も宋代に実用化され、やがてヨーロッパにまで伝えられた。

③都市への人口集中はしばしば疫病の流行を引きおこし、宋・金では医学の研究も進んだ。



**高麗版大蔵經** 木版印刷の技術は高麗にも伝わり、高麗版大蔵經は諸国で広く珍重された。写真は韓国慶尚南道の海印寺に現存する版木で、13世紀のもの。

①モンゴル語で「集会」の意味。有力者が集まって、カンの選出や遠征など重要な事柄を合議のうえで決定した。

②モンゴル語ではイェケ＝モンゴル＝ウルス。ウルスは「国」を意味する。

③カンにまさる「皇帝」の意味で、この称号は元の君主に受け継がれた。なお、時代がくたると「カン」「カアン」は「ハン」「ハーン」と発音されるようになった。

④モンゴル軍は、1241年のワールシュタットの戦いでドイツ・ポーランド連合軍を破り、同時にハンガリーにも侵攻したが、オゴデイ死去の報告を受けて中央ユーラシアの草原地帯に引き揚げた。

⑤チンギス＝カンの長子ジョチに与えられた所領をもとにしているため、このようにも呼ばれる。

イル＝ハン国時代に描かれたモンゴル騎士。戦士は騎射に適した筒袖の衣を着用し、短い合成弓を使っているが、繊細な頭飾りなど外見への配慮もうかがわれる。



## モンゴルの大帝国

2

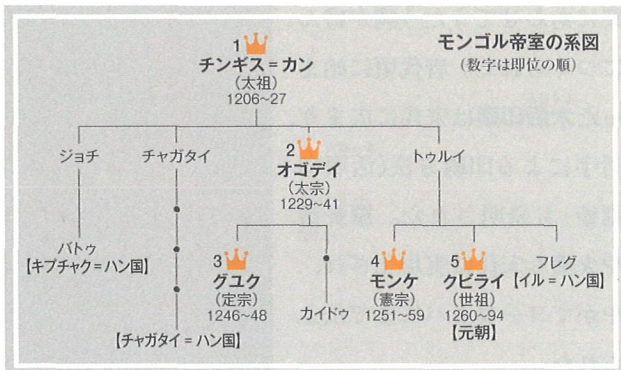
Q> モンゴル帝国の成立には、どのような世界史的な意義があるのだろうか。

### モンゴル帝国の形成

Q> この時期に巨大な帝国が成立した背景には、何があったのだろうか。

12世紀初めに中央ユーラシア東部でキタイ(契丹、遼)が滅亡し、その一族が西方の中央アジアに逃れてカラキタイ(西遼)を建国すると、遊牧諸勢力のあいだに再編の動きが強まった。やがてモンゴル高原東北部で頭角を現したテムジン<sup>Chinggis Khan</sup>は、1206年のクリルタイ<sup>1132~1211</sup>でチンギス＝カン(ハーン)として即位し、モンゴル系・トルコ系の諸部族を統一して大モンゴル国<sup>1162頃~1227</sup>を建てた。彼は、軍事・行政組織として、配下の遊牧民を1000戸単位に編制した千戸制をしき、みずからの親衛隊を含めて強力な騎馬軍団を整えた。

チンギス＝カンは、この軍団を率いて東方の金を圧倒したのち、ムスリム商人らの協力を得て西方遠征に出発し、中央アジア・イラン方面の新興国家ホラズム＝シャー朝<sup>Khwarazm Shah 1077~1231</sup>を倒した。彼は遠征帰還後に西夏<sup>せい か 1207~55</sup>を滅ぼすと、まもなく死去したが、彼の子や孫たちは相互に権力を争いながらも征服戦争を継続した。カアン<sup>Bat 1207~55</sup>を称したオゴデイ<sup>Ogodei 1229~41</sup>が金を滅ぼして華北を領有する一方、バトゥ<sup>Batu 1207~55</sup>は西進してロシアや東ヨーロッパを制圧し、中央ユーラシア西部にキプチャク＝ハン国<sup>Kipchak 1213~1502</sup>(ジョチ＝ウルス<sup>Chagatai 1306~46</sup>)を建てた。その後、中央アジアにはチャガタイ＝ハン国(チャガタイ＝ウルス)が成立し、西アジアではフレグ<sup>Hulegu 1218~65</sup>がアッバース朝を滅ぼしてイル＝ハン国<sup>1258~1353</sup>(フ



ハン位をめぐって、カイドウとフビライとの長期にわたる争い(カイドウの乱)のような相続争いもしばしばあった。



モンゴル帝国の最大領域

レグ=ウルス)を建てた。華北に拠点をおいたクビライは、カアンを称したのちに南宋を滅ぼし、中国全土を支配した。

こうして13世紀後半には、中央ユーラシアとその東西各地に、モンゴル人の政権が並び立った。各政権は高い自立性を持ちながらもカアンのもとにゆるやかに連合したので、これら空前の規模のまとまりは、モンゴル帝国と呼ばれる。この帝国を構成していたのは民族・宗教ともに多様な人々であり、中央ユーラシアの西部では、モンゴル君主など支配層も含んだイスラーム化とトルコ化が進んだ。

## 元の東アジア支配

Q> モンゴル帝国による支配は、東アジアにどのような影響をおよぼしたのだろうか。

モンゴル高原から華北・チベット・雲南・朝鮮半島におよぶ地域を勢力基盤としたクビライは、元(大元)という中国風の国名を定め(1271年)、モンゴル高原と華北の境界に新たな都を築いて大都と称した⑥。大都はモンゴル帝国全土をおおう駅伝制⑦と連結され、運河により渤海湾とも結ばれた。元が南宋を滅ぼすと、海上交易で繁栄していた杭州・泉州・

⑥ 大都是中国式の計画都市で、現在の北京市街の基礎となった。城内には運河と連結された大きな湖がつくられ、船が直接大都に乗り入れられるようになっていた。

⑦ モンゴル語ではジャムチ。幹線道路に沿って駅を設け、周辺の住民から馬・食料などを提供させた。モンゴルの王族や官庁から許可を得て牌子(→p.143)を受けたものは、各駅で宿泊・食事・馬の交換などの便宜を与えられた。



新安沈船 韓国南西部の新安沖からみつかった、元の時代の沈没船。いわゆるジャンク船で、日本の寺社名を記した木簡の荷札とともに、膨大な数の陶磁器や宋の銅銭が発見されている。

観星台(元代の天文台) 郭守敬は中国各地に設けられた観星台において、西アジアの天文学の技術を取り入れつつ、精密な天体観測をおこなった。そのデータにもとづいてつくられた授時暦は、日本にも受容された(江戸時代の貞享暦)。



銀錠 モンゴル帝国で流通した銀塊は、約2kgが基本単位であった。形状は様々だが、同じ重さのものが世界各地から出土している。2kgの銀錠を「元宝」と呼ぶ習慣は、こののちも中国に残った。



交鈔 この写真のものにはクビライ時代の年号が入っている。額面は様々で、これは銅銭2貫分の価値(もと銀錠の50分の1に相当)とされたものである。ただし、交鈔の実際の価値は大きく変動した。

ビルマへの遠征後にパガン朝は滅亡したが、ベトナム遠征は陳朝によって撃退された。

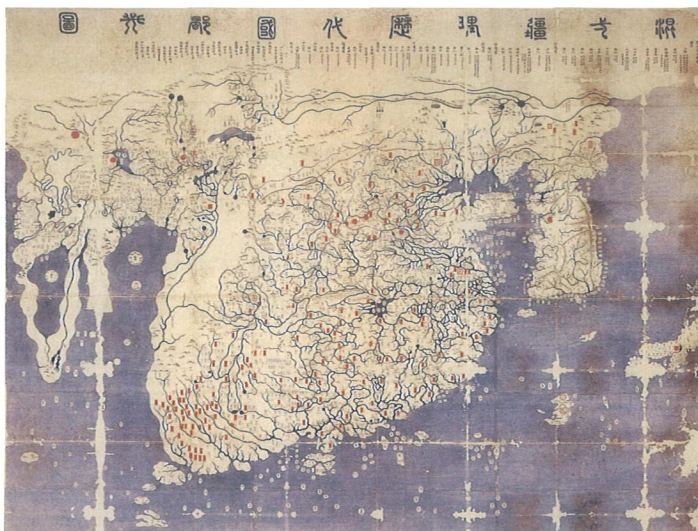
広州などが元の支配下に入り、山東半島を経て大都に向かう海運と、杭州と大都を直接つなぐ新しい運河によって、豊かな江南もモンゴル帝国の商業圏に組み込まれた。こうして、大都を結節点に、陸路と海路の交易・情報ネットワークが結合された。また、クビライが樺太・日本やベトナム・チャンパー・ビルマ・ジャワなどに送った遠征軍は各地域の政治や経済・文化に大きな影響を与え、商業圏の拡大にも寄与した。

モンゴル帝国における陸と海の交易を担ったのはおもにムスリム商人で、ユーラシアで広くおこなわれていた銀経済(銀による決済)が中国にもおよんだ。元は塩の専売を実施したほか、取引税などによって莫大な銀を集め、紙幣(交鈔)を発行して銀の流通量の不足をおぎなった。利用価値が低下した銅銭は、日元貿易を介して、日本へ輸出された。

元の統治は中国的な官僚制度によってなされたが、中枢はモンゴル人が握った。色目人と総称される中央アジア・西アジア出身者は、経済面で力をふるった。金の支配下にあった契丹人・女真人を含む華北の人々は漢人、南宋のもとにいた人々は南人と呼ばれた。商業に力を入れた元は支配地域の社会や文化をさほど重視せず、儒学や科挙の役割は大きく後退したが、暦の改良や大都の水運整備に従事した郭守敬のように、実用的な能力のある者には登用の道が開かれていた。支配層のモンゴル人にはチベット仏教が重んじられ、都市の庶民のあいだでは『西廂記』『琵琶記』に代表される戯曲が流行した(元曲)。

クビライは高麗を属国とし、高麗を足場に日本に遠征した。

ヴェネツィアから出発するマルコ・ポーロの一行（右手中ほどの小舟に乗ろうとしている一行）『世界の記述』では日本についても述べられており、日本は黄金や真珠に満ちた豊かな島ジバングとして、ヨーロッパに知られることになった。



「混一疆理歴代国都之図」15世紀初めに朝鮮でつくられた世界地図。交易活動がもたらしたモンゴル時代の地理的知見をふまえており、ヨーロッパ人による「発見」に先だって、アフリカ大陸(左端)南端の喜望峯(→p.158)を描いている点などが注目される。図はのちの時代の模写。

## モンゴル帝国時代の 東西交流

Q この時代の東西交流には、どのような新しさがあったのだろうか。



「混一疆理歴代  
国都之図」

モンゴル帝国の成立によってユーラシア東西の統合が実現すると、ヒトやモノ、情報の移動・流通が活発化した①。中央ユーラシアでは、仏教徒のウイグル商人やムスリム商人が富裕なモンゴル王族と手を組み、奢侈品などの盛んな取引をおこなって利益を分け合う仕組みも生まれた②。

当時十字軍をおこしていたヨーロッパ人は、東方の巨大な帝国に関心をいだいて、ローマ教皇はプラノ＝カルピニを、フランス王ルイ9世はルブルック③を使節としてモンゴル高原に送った。クビライに仕えたとされるイタリア商人マルコ＝ポーロの見聞をまとめた『世界の記述』（『東方見聞録』）は、ヨーロッパで大きな反響を呼んだ。また、13世紀末に教皇の命で大都に派遣された修道士モンテ＝コルヴィノは、そこでカトリックの布教にあたった。

モンゴル帝国によるユーラシア東西の統合は、学術や技術、思想面の交流も促進し、その成果は歴史記述から、地理学、地図作製、多言語からの翻訳、天文学、医薬、工芸、美術、攻城兵器に至るまで広い分野におよんだ。また、ラシード＝アッディーンは各地の情報を収集して、モ

① 同時代のあるイタリア商人は、「黒海北岸のクリミアから中国までの道中は日夜を問わずに安全である」と書いている。

② これらの商人たちは、モンゴル王族から交易の特権や国際通貨としての銀・生糸の出資を受けて取引をおこない、出資者と利益をわけあった。こうした共同関係から、彼らはオルトク（仲間）商人と呼ばれた。

③ ルブルックから情報を得たロジャー＝ペーコン(→p.135)は、モンゴルの「世界制覇」は天文学など科学の活用起因すると考えた。



元の染付 青花とも呼ばれる。イスラーム世界からもたらされたコバルトを顔料に使用して焼かれた。

①クビライの顧問で、チベット仏教(→p.50)僧のパクバは、モンゴル語や漢語などを音写する**パクバ文字**をつくった。

### モスクワ大公国もしだいに勢力を伸ばした。

②これは草原地帯の小動物に宿していたペスト菌が拡散したものと考えられている。ヨーロッパでは**黒死病**(→p.126)と呼ばれ、膨大な死者が出た。

③その後クビライの血統は絶えたが、チンギス=カンのほかの子孫はカアン(ハーン)の称号を保持し、その権威はのちに清朝(→p.157)に受け継がれた。

④モンゴル帝国以来、中央ユーラシアではチンギス=カン家の男系子孫だけが君主となりうるというルールができた。そこでチンギス家出身ではないティムールは、チンギス家の娘婿や大將軍などの称号を用いた。

ンゴル史をはじめとするユーラシア世界史『集史』をペルシア語で著した。一方、中国から西アジアに絵画の技法が伝えられ、イランで発達した写本絵画に大きな影響を与えた。また、景德鎮では西方伝来の顔料を利用して白地に青色の模様を浮かべる陶磁器(染付)が生まれ、これは「海の道」を通して世界各地へ大量に輸出された。

帝国内では、モンゴル語のほかにトルコ語・ペルシア語・漢語・チベット語・ラテン語・ロシア語など多様な言語が用いられ、文字を統一する試みもなされた①。

## モンゴル帝国の解体

Q▶ 帝国解体の要因は、何だったのだろうか。

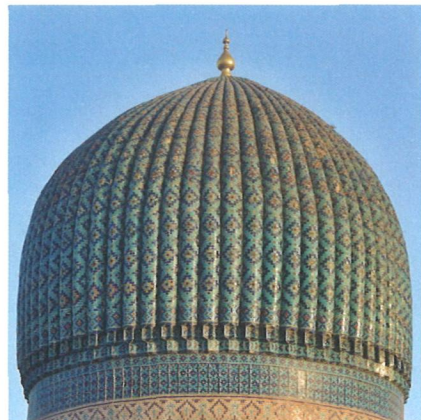
中央ユーラシアを統合したモンゴル帝国のもとでヒト・モノの移動が活発化したが、14世紀には細菌の拡散によるユーラシア規模での疫病②の流行や気候変動による天災が重なり、各地で飢饉や内紛が頻発して、モンゴル諸政権の分裂・衰退が進んだ。

キプチャク=ハン国は、14世紀末にティムールの攻撃を受けて弱体化し、15世紀に入るとカザン=ハン国やクリミア=ハン国などに分裂した③。中国でも、元による交鈔の濫発や専売制度の強化が、黄河の決壊などによる飢饉とあいまって民衆を苦しめた。こうしたなか、14世紀半ばに**紅巾の乱**をはじめとする反乱が各地でおこり、元は1368年に明軍に大都を奪われて、モンゴル高原に退いた④。

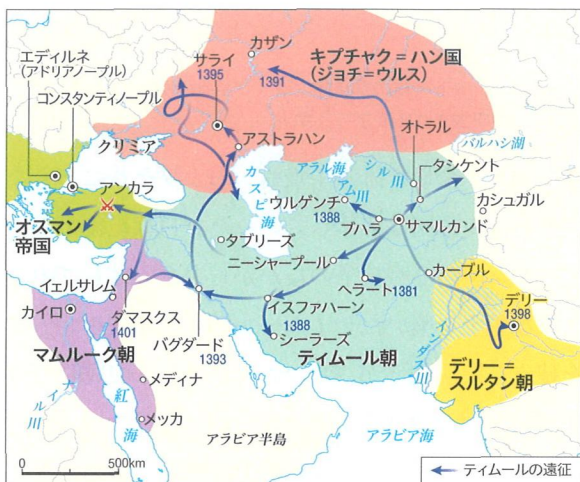
## ティムール朝の興亡

Q▶ ティムール朝がモンゴル帝国から受け継いだものは何だろうか。

14世紀半ば、中央アジアのチャガタイ=ハン国は東西に分裂し、諸勢力の抗争のなかから**ティムール**が頭角を現した。ティムールは中央アジアにティムール朝を建てたのち、キプチャク=ハン国に打撃を与える一方、イル=ハン国滅亡後のイラン・イラク地域を征服し、**アンカラの戦い**ではオスマン軍を破ってバヤジット1世を捕虜とした。彼はチンギス家の権威を尊重しつつ④、トルコ系・モンゴル系遊牧民の軍勢力とイラン系定住民の経済力や行政能力をたくみに結合した。さらに、彼はモンゴル帝国の再興をめざして明討伐の東方遠征に出発したが、その途中で病没した。ティムールの死後、王朝は分裂と内紛を重ね、やがてトルコ



ティムール廟とそのドーム



ティムールの遠征とティムール朝の勢力範囲

Q▶ 1404年にカスティリヤ王の使節としてティムールをたずねたクラヴィホは、大都市サマルカンドの繁栄ぶりを活写した。クラヴィホは、なぜティムールのもとをたずねたのだろうか。

### サマルカンドの繁栄 ——クラヴィホの旅行記から

この大都市、そして、その周辺の豊かさはまことに見た目にもすばらしいものである……このように交易もさかんにして、その都をもっとも立派な町にしようと、ティムールはつとめていたのである。そして彼が遠征したところからは、その土地の大部分の男子をサマルカンドに強制移住させ、同時にいろいろな国の熟練した職人たちも連れてきた。たとえば、ダマスカスからは、そこに居た職工を全部連れてきて、絹織業に就かせていたし、……このようにして、今やサマルカンドにはあらゆる民族の者が集まり、人口も非常に増え、家族も含めてその数は15万以上だといわれていた。

(クラヴィホ著、山田信夫訳『チムール帝国紀行』)

系の遊牧ウズベク<sup>Uzbek</sup>⑤によって滅ぼされた。

ティムール朝の時代には、イル＝ハン国で成熟したイラン＝イスラーム文化と中央アジアのトルコ＝イスラーム文化とがまじわり、文芸や建築などの分野で高度な文化が生まれた。首都サマルカンド<sup>そうだい</sup>には壮大なモスクやマドラサが建設され、ティムール朝君主による文芸保護のもと、ペルシア語文学や写本絵画の傑作と並んで、トルコ語(チャガタイ語)の文学作品が現れた。また自然科学でも、ティムール朝の君主ウルグ＝ベ<sup>Ulugh Beg</sup>ク<sup>ベ</sup>が建設した天文台<sup>れきほう</sup>を中心に、天文学や暦法が発達した。

⑤キプチャク＝ハン国のもとでイスラーム化した遊牧集団の総称。中央アジアのオアシス地域でしだいに定住化した。